慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	堀江博士著 増補改版労働問題の現在及び将来
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.4 (1921. 4) ,p.586(158)- 588(160)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210401-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

九一六年の三月に既に社會民主勞働團を組織し翌年四月スパルタクス派等と合同して獨立社會民主黨を組織したのである、隨て一八八頁にリーブクネヒトがスパルタカス團を組織したとあるのも正しくは再興したとある可きである。又二四五頁にブルヨジア自ら勞働省を創設したとあれど勞働省は一九〇六年にクレマンソーが始めて內閣を組織した際に創設したのである。（田中萃一郎）

堀江博士著　**增補改版勞働問題の現在及び將來**

四六版三九四頁
定價金三圓二拾錢
大鐙閣出版

此の書は曾つて吾人が本誌上に於て紹介せるを增補改訂し、前版の文章體を口語體に改め、附錄「サボタージュ」論を第四章中に編入し、新たに第十、第十一の兩章を設け、從來の五號活字をブルヂュワ活字に組替へて新たに上梓せるものなり。追加兩章は「利益分配制度」並びに「經營權分配制度」に關する簡明なる論述なり。著者は勞働問題が一時的なる社會の動搖に由りて消長す可き性質のものに非ざるを信ずると共に、斯問題の內容は時勢の推移に伴れて、常に變動せざる可らざるを想ひ、爰に舊版の全部に亘りて嚴密なる改訂を施せるものなり。自家の著書をして常に時代の進展に遲るゝことなからしめんことを努めて倦まざるものは堀江博士なり、而して博士に就きて、其の勞働問題に關する最新最良の知識を受けんとする讀者は須らく舊版を拋つて此の改訂版を手にせざる可らず。（但し、吾人が本版に於て遺憾とする所のものは改訂新版が却つて舊版に比して著しく多大なる誤植を有すること是れなり。一頁に就きて數ヶ所の誤謬を發見し得可き箇所少しとせず、次版に於て更らに嚴密なる校正を希望して止まざるなり）。

而も勞働問題の根本に就きて、博士の抱懷せる意見は毫も變ずることなし。即ち博士は「勞働問題を解決するに當り、勞働者の自治と國家の施設とを併行せしむるを必要」となし「勞働者が其の自治的能力に依つて、自己の利益を防衛し、又た之れを發揚するは、勞働問題解決上に於て、重要なる關係を有するものにして、而して此の自治的能力を實現する團體の勞働組合に外ならざる以上、國家は勞働組合の成立、成立後の運動、將來に於ける維持等に就きて、總べて、其の障碍と爲るものを除き、便宜と爲る可きものを與ふるの方針に出でざる可らず」と做すなり。洵に博士の所論は穩健、老實、著實、眞摯にして、些も過激、急進、躁暴、浮薄の分子を發見すること能はず。

然れども密かに、案ずるに勞働問題の解決は勞働者の自治と國家の施設との併行に由りて之れを期待すること能はず。解決は併行線が融合一致して一線と爲れるの時に於て之れを見出し得可し。問題は廣義に於ける勞働者の自治體が即ち國家たるに至れるの時、初めて之れを解決し得可きものには非ざるか。凡ゆる階級的分岐は消滅し去つて、物質財及び勤務給付の提供者なる人類と、其の享有者、使用者及び消費者としての人類とが同一體と爲れるの時、問題は眞個の解決を見る。博士の理想鄕も亦た恐らくは此處に存するなる可し。されど博士は是に至つて默せり。博士は理想を歌ふ詩人に非ずして現實當面の問題に即する活學者なり。而して博士が、曩日の空想は必ずしも今日の空想に非ず、時勢の急變、驚嘆に値するものありと稱して其の辛辣なる筆を擱けるの處に長閑なる詩人の歌は發するなり。ウイリアム・モーリス其の The Day is Coming. に於て歌つて曰く、

O strange new wonderful justice! But for whom shall
we gather the gain?
For ourselves and for each of our fellows, and no
hand shall labour in vain.

Then all mine and all thine shall be ours, and no
more shall any man crave
For riches that serve for nothing but to fetter a friend
for a slave.

And what wealth then shall left us when none shall gather gold
To buy his friend in the market and pinch pine and the sold?

（高橋誠一郎）

和辻哲郎著「日本古代文化」

岩波書店發行
四六版四七六頁
定價貳圓五拾錢

最近日本の文化に對して種々なる歴史的研究の數多發表されるのは吾人の最も愉快に感ずるところである。素より本書は唯古代一般に對する觀察であつて、嚴密な意味で歴史であるとは云へない。然し其の研究方法として人類學考古學言語學等に基礎を置いて上代日本人の文化を明かにせんとするのは、最近かの H. G. Wells が其の著"Outline of History."に於いて試みたるものと同じく、又其の文體も共に流麗、"It is written plainly for the general reader, but its aim goes beyond its use as merely interesting reading matter"（Outline of History. p. 1）である。故に本書は寧ろ專門的の歴史としてゞはなく、一般的讀物として歡迎さるべきものであらう。

本書の內容は殆ど全部の三分の一を占める「上代史概觀」以下、「歸化人と上代文化との關係」「古事記の藝術的價値」「歌謠」「音樂と舞踏」「信仰と神話」「道德思想」「造形美術」の八篇からなる。先づ是等文化の背景として上代史を概觀せんとした著者は日本民族の由來から論を起して居るが、其の主たる目的は「佛教渡來以前の文化を古事記日本書紀の傳說歌謠及び同時代の古墳土偶等によつて觀察しようとする」（一頁）にある。而して又著者が最も多くの勞を費したのは「二十幾人かの權威ある專門家の勞作を基礎とした」上代史概觀であらう。且つ著者は是等分科の專門家の研究が結局いかなる目的に奉仕すべきであるかを示すものとして本書の意義を認めて居る。（序四頁）

然し本書が多分の藝術的色彩を以つて吾人をして一讀澁滯させるやうなことがない代りに、文化の歸趨闡明に關しては未だ十分に滿足を與へるものと云ふことは出來ない。殊に其經濟的方面に至つては素より困難な問題ではあるが極めて不完全である。勿論古代人の經濟的文化に對して多少の敍述がなくはないが、それは甚だ尠少である。我が祖先の此の方面の生活を一層明瞭にするにあらずんば、日本古代文化の研究として完全なものであるとは云へないと思ふ。

（野村兼太郎）

荒川鑑譯　社會主義審判

四六版　二二五頁
正價金一圓三十錢
有斐閣發賣

本書は舊獨逸帝國議會自由黨首領オイゲネ・リヒテル氏の原著をヘンリー・ライト氏の英譯 Pictures of the Socialistic Future（一八九三年初版）より譯出せるものである。小說體を以て敍述せられたる本篇の根子は「社會革命が獨逸に勃發したものと假定して、社會主義にして實現せば、果して如何なる狀態を現出するかを描寫し、次に此の社會主義實現の曉には社會主義者の想像するが如く、決して人類により大なる幸福乃至文化を齎すものでない事を指摘し、終には民人の不滿、自由に對する抑壓より反動革命の慘禍に及ぶ可き」を述ぶるに在る。

現在に於て描出した將來の狀態は矢張り現在の狀態である。將來は何人も現在に於て開くことの出來ぬ幽昏神秘の裡に鎖されてゐる。加之ならず、將來を描かんとする一切の計畫は悉くローマンスの性質を帶びてゐる。而して是れ等のものは他日革命に於ける人民の創造力を微弱ならしむ可きの不利益を有してゐると稱せられてゐる。然しながら他方から言へば、具體的觀念は其の實現に先んずるものである。クロポトキンの語を借りて言ふならば、多數の物理學者や技術家が「空氣よりも重い機械を以てする天空征服」のローマンスを其の具體的形態に於て自己の眼前に置くことがなかつたならば、恐らく現代に於ける航空術の進歩は望み得られなかつたであらう。現實は固より小說より奇である。而して苦心慘憺の結果たる豫定の計畫は往々にし